

京都市放課後対策事業検討会議 摘録

日 時 令和3年12月21日（火） 14:00～15:30
会 場 職員会館かもがわ 2階 大会議室
出席者 会 長 神部 純一 （滋賀大学教育学部教授）
副会長 稲川 昌実 （公益社団法人京都市児童館学童連盟会長）
〃 中村 薫 （京都市小学校校長会副会長・京都市向島藤の木小学校長）
委 員 木戸 玲子 （公益社団法人京都市児童館学童連盟施設長会副会長）
〃 國重 晴彦 （公益社団法人京都市児童館学童連盟常務理事）
〃 高見澤 剣 （市民公募委員）
〃 永井 美保 （市民公募委員）
〃 中西 智佳 （京都市小学校長会会計・京都市立朱雀第二小学校長）
〃 古澤 奈央子（京都市立中学校PTA連絡協議会副会長）

【※会長，副会長を除き五十音順。敬称略】

事務局 子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課
（塩山子ども若者未来部長，和田育成推進課長，荻原担当課長 他）

神部会長

まずは議題1の，令和3年度の実施状況について，事務局から説明をお願いする。

事務局 <資料1「放課後まなび教室の概要」>
<資料2-1「放課後学び教室の実施状況」>
<資料2-2「令和3年度放課後まなび教室学校別一覧」>

神部会長

次に児童館・学童クラブの説明をお願いする。

事務局 <資料3「児童館・学童クラブ事業の概要」>
<資料4「放課後ほっと広場」の実施状況について>
<資料5-1学童クラブ事業登録児童数>
<資料5-2「学童クラブの実施場所の確保状況」>

神部会長

数字的に見ると，放課後まなび教室の方はかなりコロナの影響を受けて，昨年，今年度と実施校が減ってきている状況。ただ学童の方は，2年度と3年度の差がマイナス32人ということで大きな影響は受けずに子どもたちを受け入れていただいている。

さて、それぞれのお立場から今年度の実施状況、特徴的な取組などについて、ご質問・ご意見も含めて委員の方々に伺いたい。

中西委員

今年度に朱雀第二小学校に赴任したがばかりなので、前任校（洛央小学校）についていろいろお話できることがある。コロナ前まで自分が教頭をしていた時に、放課後まなび教室の事務的なことをたくさんしていたが、その時は、放課後まなび教室に通いたい子どもが多くいた。前任校では週に3日間実施していたが、実施している教室が最大で40人のため、参加人数を調整し、実施回数を減らしている状況だった。しかし、3日も通えるなら通いたいという子どもが多くいたので、実施場所の確保や指導者がたくさんいれば、参加人数を増やしたいと思っていた。今の学校も、場所や指導者がそろえば、もっと多くの子どもが通いたいと思っているのではないかなと思う。

中村委員

今年度、本校（向島藤の木小学校）で放課後まなび教室を開始したのは10月末になる。4月からずっと緊急事態宣言等が出され、宣言の解除後に、本校の修学旅行が10月の半ばに予定されていたこともあり、まなび教室の開始が遅くなってしまった。事業を開始して2カ月弱という状況。登録の人数は少ないが、元々本校は、単級の小さい学校なので、15名の登録というのは全校生徒の約1割の登録者数となっている。本来ならば4月から実施する事によって、子どもたちに宿題などに取り組み、放課後に学習する習慣をつけていくという大きな役割を担っている。しかし、開始が遅れことにより、なかなか学習する習慣が身につけにくい日々を子どもたちは過ごしている。

また、コロナの影響で放課後に運動場で遊ぶということもなかったので、外で遊ぶということに子どもたちは興味を持っており、放課後まなび教室に通っている子どもたちも含めて、教室の中で過ごすということには、少し居づらい状況にある。

先ほど、「学校によって登録者数に大きな差があるのはどうしてか。」という質問があったが、まさに学校事情を抱えているのではないかなと思っている。学習習慣をつけることも本事業の大きな役割ではあるが、子どもたちの居場所として、“おかえり”と迎えてくださる先生がいる、“あのね”と言ったら“なに”，と聞いてくださる先生がいることは、ありがたいと思っているので、参加人数は少ないけれども、今後もまなびの先生、まなびの部屋というところに、子どもたちが感じている安心感は大きいものがある。

古澤委員

娘が2人とも放課後まなび教室に通わせていただいた保護者の声としてお話しする。保護者としては、宿題を見ていただけるし、お友達との交流はもちろん、地域の方と接するということが一番大きかった。普段しゃべることのない年配の方や、近所の方々にすごくよくしていただき、いまだにまなびの先生に会いに行ってくると言っており、すごくいい環境で過ごさせていただいた。コロナ禍で今までのような運営は厳しいかなと思うが、感染状況が落ち着いていけば、以前のように放課後まなび教室に戻り、子どもたちも良い環境で放課後時間を過ごせると思う。

神部会長

そこが放課後まなび教室の一番いいところだ。多様な人間関係の中で、地域の人たちとのつながりを持つことが子どもたちにとってもいい体験になっており、いろいろな調査によると、そういった経験が学力の向上などに結び付いているという結果も出ている。このような関係構築を、本事業を通じて取り戻していけたらいいと思う。

永井委員

私の子は、放課後まなび教室には残念ながら一度も行ったことがない。元々保育園に行っていたので、小学校 1 年生になったら学童クラブに行くものだと考えており、小学校に入学するまで放課後まなび教室のことは知らなかった。保育園の年長時にいろいろな情報を知れていれば、例えば、来年の月火水は放課後まなび教室に行くことも計画できたので、保育園時に放課後まなび教室の広報があればよかったかなと思った。

神部会長

広報だが、保育園とかに向けて実施していないのか。

事務局

保育園への周知はできていない。放課後まなび教室については、小学校に入られた児童に案内するというのが基本になっている。保育園に通われている方などを対象に、いかに周知を図っていくかが、今後の課題だと考えている。

学童クラブと放課後まなび教室の募集時期にギャップがある。学童の募集は例年 1 月に一斉募集を実施している。永井委員におかれても、おそらくは 1 年生に入られる前の 1 月に学童クラブの募集案内があり、その時点では学童クラブしか選択できなかったとお察しする。一方、放課後まなび教室は、小学校入られてから募集があるので、募集の開始時期の違いが、判断の違いになるケースはある。

神部会長

学童クラブの募集と同時に放課後まなび教室の周知ができるならば、保護者の方々も両方を選択することが可能になる。放課後まなび教室の場合、小学 1 年生は後期から実施しているのであれば、後期から募集しますよという情報があっても良いかもしれない。

事務局

周知方法については、今後検討していきたい。

高見澤委員

まなびサポーターとして、参加させていただいている。自分が行っている小学校は児童の参加率が非常に高い。特に 2・3 年生は積極的に参加してくれているが、サポーターは、大学生の私が 1 人と地域の方 2, 3 人で見ている状況にある。学習支援に当たり、対応できるスタッフの人数が少ないと感じている。大学生は、まなびサポーターの募集があることをあまり知らないと思う。私は教育職課程のある大学に

通っていることもあり、まなびサポーターの募集を知ることができたが、普通の大学だと知る機会が少ないので、大学全般にボランティア募集の周知を検討するといったのではないかなと思う。

神部会長

滋賀大学では、教員免許を取得するに当たり、自分で教育系のボランティアのプログラムを見つけてきて、30 時間取り組まないといけない。滋賀大学の学生も「今日、放課後まなび教室のサポーターに行ってきました。」とか話しており、お世話になっているようだ。関心がある子は自分から探すけれども、そうじゃない子に対して、そういう情報をどう届けるか、情報・PR・広報面が、今後の検討課題になるのではないかなと思う。

國重委員

現在、児童館はコロナの対応が落ち着いてきたが、大変な時は自由来館や乳幼児に対する取組がほとんど中止になった。児童館の行事についても、校外での活動や、地域との交流、異年齢同士の遊びなど、児童館ならではの生活の在り方が非常にやりにくい状況にあったため、児童館全体としては大きな影響を受けた一年だった。一方、学童クラブは仕事をしていらっしゃるお父さん、お母さんの生活を支えるということで、コロナ禍であっても閉めることなく継続的に行ってきた。

木戸委員

今年はコロナの影響で児童館機能がストップしているが、地域の中にいらっしゃる小さい子どもを連れてお母さん方や子どもたちの声が届くように、また、受け止められるようにということで各児童館が積極的に動いていた。多くの機関が閉じており、間接的な電話対応・電話相談になる中で、やっぱり対面で話したい、直接話を聞いてほしいといった声には、地域の中に児童館があるからこそ対応できたことかなと感じている。

子どもへの影響も本当にこの 2 年を振り返ると今大きく表れてきている。一つは何でもない日常の遊び方などが途切れてしまっており、例えば、月一回児童館で駄菓子屋さんをやっているが、それは今まで 1 度も子どもたちへ説明していなかった。しかし、11 月に久しぶりに駄菓子屋さんをした時に、新一年生の子が「先生これどうするの？」と聞かれた。今まで 1 回も説明したことなかったが、これまで自然に教えてもらっていたことが途切れてしまい、子どもたちが見て学ぶ機会が減ったのだと感じた。一時期、児童館学童クラブもすごく利用を制限していたことがあって、その時はあたりまえの遊びが、大きく勝手なルールに変わっていた。子どもたちの中での伝承みたいなことが途切れており、それは子どもたちの日常の中ですごく大事なことだと感じている。

また、子どもの放課後を考えると、宿題をやらなければならないということも、もちろんあるが、自由であるとか、やりたいことができるとか、或いは何にもやらないとか、そういう選択肢がたくさんあるはずなので、放課後まなび教室で宿題を済ませてきたことにより、本当に明るい顔して帰ってきて、「今日は宿題せんでもええねん。まなびでやってきた。」みたいな感じで、子どもたちの負担が軽減されていると思う。もちろん学童クラブの中でも宿題をしているが、子どもたちにとっては、放課後まなび教室に行けば「気持ちが軽くなる場所」というのは、私も現場にいて実感しているところだ。

でも、それだけではない子どもの放課後を考えた時に、児童館が地域の中にあり、子どもの生活の中で

多様な人たちと出会える機会を創出しているということで、多様な価値観の人と出会って、その中で自分の意見をもったり、折合いをつけたりする経験ができる場所であると思う。子どもの放課後において、放課後まなび教室や、児童館・学童クラブそれぞれに、出会いがあることは、すごく大事なことだと感じている。あとは、夏休みとか長期的な休みの時に対応できるのは、学童クラブであるからこそその機能だと思う。

神部会長

コロナ以前の運営と比較すると、現在は運営内容がかなり制限されているというご意見だった。こうしたことが、これからどう変わっていくのかということだが、ある意味、こういう事態になって、放課後まなび教室や学童というものの意味や価値を、運営する側も、保護者の方々も、改めて考えたり、感じたりする機会につながっているのではないかと思う。

稲川副会長

私たち大人は、この2年間がすぐ経ったような気がするが、小学校の時ってものすごく長かったような記憶があると思う。子どもにとってはこの2年間いろんな体験ができなかったことは、大人以上にダメージがあると思うので、そういうところも今後考えていく必要がある。

事務局

高見澤委員から大学生スタッフの募集の機会についての話があったが、スタッフを確保するというのは、放課後まなび教室にとっても大きな課題だと思っている。京都市の広報媒体をはじめ、ボランティアの募集をしている雑誌など、様々な広報媒体を使ってスタッフの公募等を行っている。

しかし、大学生に直接届くようなアプローチは、あまりできていないので、どういう形でアプローチできるか考えていきたい。

神部会長

コロナの影響の中で、やりたいことがやれない、というもどかしさを感じている方もたくさんいると思うが、来年以降に普通の生活が戻ってきて、放課後まなび教室そして学童の活動の中で、子どもたちの笑顔が見られるようになっていければと思う。

では、次の議題である児童館学童クラブ事業と放課後まなび教室の連携に向けた取組について、事務局から説明をお願いします。

事務局 <資料6-1「放課後こどもミーティング」について>

<資料6-2「学校及び両事業への関係者の聞き取り調査の結果」>

<資料6-3「放課後こどもミーティングにおける協議内容と今後の連携の方向性について」>

神部会長

学童クラブと放課後まなび教室との連携の必要性ということについては、私の記憶では、お互いのやっていることの共有を図ることが大切だということでは終わっている。コロナにより、お互いに行き来す

ることもできずに今日に至っているが、やっとその一步を踏み出した。

事務局の調査によると、学校と学童、学校とまなび教室との間での情報共有はなされているが、学童クラブと放課後まなび教室との間の情報共有が、全体的な傾向として途切れてしまっており、そのことにより、様々な形で学校の先生方の負担が増えてきている状況が明確になっている。

放課後まなび教室と学童クラブとの間での情報共有の仕組みを作り、うまく三者がつながりながら、子どもたちの豊かな放課後というものを保証していくことが必要ではないか。そういう意味では、来年度このような取組の中でそれぞれお互いの事業、あるいは一番は人を知ることが重要になる。今まで連携しろと国から言われて、一体的にと口で言うのは簡単だが、なかなか進まなかった。互いをまだ全然よくわからないのに、具体的に何かやれといってもそれは無理がある。だからこそ、その一步として、まずお互いを知るというミーティングを実施することは、すごく大切なことなので、ぜひ積極的に進めていただきたい。こうした試みについて、それぞれの現場の皆さんはどのように考えているのか、或いは、今後どのように進めていったらいいのか、お伺いしたい。

木戸委員

中西委員とは前任校でうちの児童館の子どもたちが通う学校におられたので、特にちょっと気にかけられた方がいいとか、注意深く見守っていくことなどについて、主に館長と校長の間で、子どもたちの情報交換をさせていただいていた。ただし、放課後まなび教室のことになるとどうしても窓口が学校になってしまう。児童館・学童クラブの児童で、放課後まなび教室に行ってから、学童クラブへ帰ってくる場合、低学年の子は帰ってくるが、高学年ぐらいになると「ちょっと遅くなったし、学童に行ってもおやつ食べて直ぐに帰らなアカンし、そのまま家に帰ろうかな。」みたいな感じの子どもがいたりする。

放課後まなび教室の方も、小さい子のことは教室を出ていったかどうか、ものすごく見てくれているが、高学年になるとその必要性が少なくなるので、子どもが、家に帰っているのか、どこか遊びに行っているのかなど、放課後まなび教室後の児童の所在確認をする作業が割と多い。児童の所在確認は、結局のところ学校に電話をし、先生が、「今日は放課後まなび教室に行っているはずですよ。」とか、「もう終わったので学校を出ているはずですよ。」と、情報はいただけるが、子どもの安全、所在確認をするということでは、困っている点でもある。

学校を介してでないと、放課後まなび教室とつながることができてない現状の中で、学童クラブの現場も、放課後まなび教室と学童クラブがどういう関係性を持ったらいいいかというのを、館長等がどこまで意識をしているかという問題もある。連携を進めていくということを、私はこの会議に出席しているので関心を持って見ているが、ほとんどの館長は、年に1回、どんな連携していますかというアンケートが来た時に、あっと思うぐらいで、お互いを知るということはどこの現場でもしていると思うが、知ろうとする度合いに多少違いがあるのではないかなと感じている。

國重委員

連携した先に一体何があるのか、どういう子どもたちの放課後を我々として、連携することによって作っていかようとしているのかというビジョンみたいなものが恐らくはっきりしていないから、連携というもののモチベーションが高まっていけないのだろうなと私自身は思っている。今後、連携のための連携ということでは、なかなか進んでいかない。連携することによって何を生み出そうとしているのか、何を

生み出せるのかをはっきりさせていくことが、連携することのモチベーションにつながっていくのではないか。お互いどのような活動を中心に行っているのかということですから理解していないというか、わからない部分が児童館の方にはある。おそらく放課後まなび教室さんは勉強をする場を提供しているのだろうと。それ以外の所で、どういう理念があって、どんなことに配慮をしながら子どもをみているのかということもわからない状態なので、どうしても現場同士では希薄になっていく。今日ご提示があったように、お互いを知る機会というのを増やしていくという点では意味があるのだろうと思う。ただそこから何を作っていくのかというビジョンを考えていかなければいけない。今の子どもたちが抱える現実的な様々な課題に対して、児童館として、あるいは放課後まなび教室として連携することによってどういう役割を果たしていけるのかみたいな視点で両事業の連携というものを考えていく必要がある。子どもたちを巡る状況というか課題に対して、連携することによって解決に向かうアプローチにつながっていければと思っている。

高見澤委員

放課後まなび教室でボランティアをしているが、学童クラブがどこにあるかもわからない。皆さんの意見を聞いて、言われてみれば、連携はできていないのかなと思った。連携することで、放課後を作る者としては、よりよい空間ができて、小学生等が安心安全な学習の場とか、放課後の場というのは作られるのかなと思ったが、今頑張って、無理にあれもやって、これもやってと、連携するほどのメリットが正直よくわからなかった。

神部会長

正直な意見だと思う。両事業ともに必要性を感じてない。感じてないから、お互いが何をしているのかわからない状況ではないか。それは、そのままでいいのかもしれないが、だからこそお互いを知ることで、その先に自分たちだけでやるよりも、何か面白いことができるかなという可能性があるとしたら、面白い取組になると思う。

そもそもお互いを知らないのに、國重委員が言ったようなビジョンなんて描けるわけがない。まずは、知り合うところからはじめ、知り合ったその先にもう一段階先に進むようなところがでてきたら良いのではないか。同じ子どもたちを良くしようという共通の思いを持って活動をされている2つの事業だからこそ、そういう思いをお互いに共有しながら、それを連携とまではいかななくても、それぞれの活動の中に取り入れ、結果的にそれぞれの事業が充実していくのであれば、一つの方向性になるのではないかなと思う。

永井委員

地域ごとに適したかたちを探るというのはなかなか面白いなと思ったが、それは場を作る人があってのことなので、スタッフの方とかは流動性がかなりあったりする。そういうスタッフを集めるのが結構大変という話をされていたので、交流事業もなかなか難しい部分があると思う。

また、学校、学童クラブ、放課後まなび教室の相関図を見ていると、やっぱり親としては、「うちの子どこにおりますかね。」みたいな電話する時は、どうしても学校になる。それにより先生方のご負担が増えるのであれば心を痛めてしまう。

古澤委員

室町小学校区の学童クラブと放課後まなび教室は、子どもたちが活動するのにすごく適した場所だと、通っていたころから思っていた。今お話にあったように、何が目的であるとかの議論の前に、学校と放課後まなび教室、学童の皆さんの考えや、職員の方やスタッフとの意思の共有に向けて、例えば、スタッフから意見や要望など、自分が知りたいことなどを吸い上げて、それについて議論してから、その先のことを考えていけるように、まずはお互いを知ることが大切であり、何か必ず、プラスになることが出てくると思う。

また、学校の先生の顔は、地域の方も何かがあれば見たり覚えたりする機会もあるけれども、学童・児童館は通っている子どもさんのお母さんであったりとかでないと、なかなか他の保護者等の方が顔を知る機会はないと思う。室町小学校は、コロナになる前は、区民運動会に児童館の先生もいつも参加していただいて、それで地域の方と顔を覚えてお互いに知り合う機会になっていたもので、なかなかこの時期厳しいかもしれないが、みんなと接する機会を今後増やしていけるのであれば、それを契機に色々な情報交換等ができるのではないかな。

中村委員

連携することによってどんなことが変わって、どんないいことがあるのだろうかというところが明確になっていないと、なかなかそこに向かっていくのは難しいと思う。この3校のモデル校で、次年度以降も進めていかれると思うが、どんなふうに情報の整理をしていくのか、どの子どもの情報を共有するのかという問題を詰めていただいて、その上で、それを広く全市に広げていくような段階になってくるのかなと考えている。ただし、個人情報保護の観点から、体調のことであったり、気持ちの面であったりというのを広く共有することは難しい。広く共有するのであれば、どこまでの内容を共有するのか、そのあたりの問題点等を明らかにしていただきたい。

また、両事業の内容を知ることについては、まなびの指導員の先生方の研修会なんかもあると思うので、そこで学童・児童館のことを研修の中に入れていただくとか、児童館の先生はいろんなところでよく学校にも来ていただいているので、その時に時間があったら放課後まなび教室を見学していただくことなどできるのではないかと考えていた。

中西委員

中村委員の意見とすごく似たことを思っていた。子どもっていろんな顔を持っており、家の顔もあれば、学校の顔もあるし、学童で見せている顔もあれば、放課後まなび教室で見せている顔もあって、でもどれも本当の姿だ。子どもは、人との関わりの中でいろんな姿を見せている。それが共有できることは素晴らしい。だから、新しい交流の場ができるのは、素晴らしいことで、連携は子どもの成長の中で必要だと思っている。ただ、中村委員がお話しされたように、どこまでを共有するのかは、個人情報の問題もあるので、全部を一緒に共有する、というのはなかなか危険だなと思う。そのあたりの課題を考えていかなければならないけれども、まずはやっぱり、どんな場所で子どもが勉強しているとか、学童に行っているのかということの、みんなが知るとというのが本当に大事なことだ。

先ほど木戸委員がお話しされたように、私は実際自分が校長をしていて、学童とつながっていることがすごくいいことだなあと実感している。子どもの成長のために大きかった。自分も前任校に長くいた分、

木戸委員とはいろんな立場でお話させてもらった。子どもを送って行って、児童館でお話させてもらったり、木戸委員から学校に来ていただいて、お話ししたりしたことは、全部子どもに返っていると思うので、そういう場が、全市に広がっていけばいいと思う。

神部会長

私も学童と放課後まなび教室の関係性というか、細かいところがわかっていないので、両事業が直接つながることは仕組として難しいのだろうか。

中西委員

お話にあった、児童の所在確認については、全部学校に連絡が入ってくる。先ほど、学校に負担なると考えてくださる発言があったが、決して負担だと思っているわけではない。子どもの情報として、今子どもがそういう状況なのかというのが学童からも放課後まなび教室からも入り、学校が全部知ることができるので、ありがたいと思っている。所在確認の連絡が負担に思うことは決してない。

國重委員

放課後まなび教室の方の顔がわからない。どうしても顔を知っているのが校長先生だったり、教頭先生だったりするので、我々としては、何かあったら学校に連絡するけれども、放課後まなび教室の責任者、リーダー的な方が一体どなたなのか、その方は毎日来られているのか、また、電話の専用回線があるのかどうかもわからない。顔がわかっているれば直接連絡することもあるだろうが、なかなかその辺がわからない。

神部会長

多分、学校によって違うのだろう。だからこそ、お互い仲良くなれば、何かあったら簡単に済むような話もあるかもしれない。確かにいま主張された、一緒にやったら結局何ができるのか。何が今よりもよくなるの。といった雲がかかったような感じは、皆さん共有している。その一方で、同じ思いを持って、同じ学区の子どもたちをよくしようと思って頑張っている人たち同士がつながるということは、決して悪いことじゃなく、むしろそこからお互いが刺激を受けながら、それぞれの事業にまた生かしていくといったメリットもあると思う。そういう関係ができていく中で、何かもう一歩次のステップに行こうと思う地域、学区が出てくれば、そこからお互いにビジョンというものを作っていけばいいし、このビジョンというのは結局、画一的に共通のビジョンを作れるわけでもないの、それぞれの地域には地域なりのビジョンであってよい。その学区でその子どもたちを相手にしている人たち同士が話し合い、つながることで、それぞれの地域のビジョンが見えてくると思う。いい機会なので、そういうつながりの中で、いろんなことをお互いが考えていける機会にさせていただけるミーティングになるよう、事務局にお願いしたい。

稲川副会長

児童館の方と放課後まなび教室のスタッフのミーティングについて、全部の児童館で義務化し、実績報告を提出してもらうことはできないか。両者に会うよう依頼して、報告書が出ていなければ、「なぜやら

ないんですか」と言えばやらざるを得ない。そしたら何とかしてコミュニケーションをとらないといけなくなるので、相手側と会わないといけなくなる。会わなかったら結局顔もわからないし、会ってみたら結構、面白い人だなとか、こういうスタッフの人がいるのだなとかがわかる。高見澤委員も、行って知り合ってみたら「この子うちの児童館のボランティアに来てほしいな」とかって言って、空いている時に行ってもらえることもできるのではないかな。

木戸委員

現状は毎年報告の時に同じことを書いてしまう。私も校長先生を通じて、放課後まなび教室を見に行ったことがある。しかし、面識がないため、放課後まなび教室に行ったときに、どなたにどういう風に挨拶したらいいかわからなかったのが、結局見て帰ってきた、みたいな感じになってしまった。もし、具体的にそれが進むのであれば、児童館やまなびのスタッフに、顔合せの機会があることをわかっていただけると、行きやすくなると思う。

稲川副会長

1年経って2年経って、結局何も進まないの、とりあえず会いなさいということでやらないと始まらないのではないかなと思う。

事務局

いくつか質問をいただいた。連携のビジョンがないという御意見に関し、連携の背景だが、大元としては、国の「放課後子ども総合プラン」があり、国では両事業を連携すべし、ということで、全国的な号令が出ている。ただ、各都市で学童の整備が整っておらず、待機児童が発生していたり、放課後まなび教室も全てに行き渡っていない状況を踏まえて、連携によりこのような穴を埋めていくというのが、国の発想としてはあると思う。京都市の場合、放課後まなび教室は全小学校で実施しており、学童も、児童館・学童保育所を163か所で開所しているが、ほぼ市内全域をくまなくカバーしていて、放課後対策としては、京都市はほぼ穴がないという状態にある。であるからこそ、連携の必要性を両者感じていただけないと思う。これまで、児童館・学童業界に対しては、年1回、連携の取組状況について照会を行っているものの、本市としても全市的に進めていくには至っていなかったという事情がある。

連携の必要性というところだが、顔見知りになって得るものがあるということ、小学校の両委員からご意見いただいた。また、神部会長のご発言にあったように、何かビジョンがあり、そこから逆算して何かをやるよりも、ボトムアップで、現場で意見を交わしながらメリットは共有したうえで、具体的方策を議論し、ミーティングの中で見出していこうというのが、このミーティングの発想なので、そういう趣旨でご理解をいただきたい。

次にミーティングの在り方においては、これから詰めていくところだが、個人情報の扱いの懸念についてご意見いただいた。このミーティングも、全部のスタッフが参加するということではないと思っており、特に個人情報を取り扱う議論においては参画するメンバーを限定することで、個人情報の拡散のリスクはだいぶ軽減されると思う。

人の流動性に関するご意見については、児童館・学童、放課後まなび教室もそれぞれの組織で運営していただいております、児童館では館長のほか、副館長をおいている施設もあり、放課後まなび教室は、実行委

員会形式で運営しているが、会長がおられて、いずれも一定長期間参画いただいたからこそその立場で担っていただいている。とりわけ、個人情報を取り扱うような案件を議論する際には、そういった代表者同士に限ってやっていただくといったやり方も考えられると思う。

神部会長

今日皆さんからのご意見聞かせていただいたが、まずは、放課後子どもミーティングを実施し、その中で、どこまでの情報を共有するのか、それがどうこれからのそれぞれの活動に関わっていくのか考えていければと思うので、事務局で進めていただきたい。以上で本会議を終了する。